

優秀賞 高学年の部

ありがとうはおかずの配達

群馬県
明和町立明和西小学校 六年

森谷 みずき

私の家には絵本の表面が見れる手作りの大きな本棚があります。

まだ小さかった頃、お風呂から上がった私とお兄ちゃん
は、毎晩寝る前に、

「今日ほどの絵本にしようかな？」

と絵本を選び、母に読んでもらっていました。この本棚
は、おじいちゃんが作ってくれたそうです。

私の部屋からおじいちゃんの家と、畑と、トマトのビニールハウスが見えます。昔は一面のぶどう畑だったそうです。おじいちゃんの家は農家です。私が生まれた頃はぶどうを作っていたそうですが年をとってしまった今はお米と私たちが食べる野菜を作っています。

その代わりに私達が生まれてからは、喜ぶだろうと実のなる木をたくさん植えてくれました。春はいちごから始まり、メロン、もも、みかん、りんご、などなど……。

今は食べ頃のすいかを毎日、冷やして食べています。毎年甘かったり、味がなかったり、ぼそぼそのこともありましたが、今年は百点満点！みずみずしいのすいかが大好きです。

夜、おじいちゃん家に行くことがあります。

母に

「おじいちゃんにおかず、持って行ってあげて。」

と言われると、喜んで「はい」と行きます。

お兄ちゃんとゲームの話をしながら暗くなった道をライトでてらし、とことこ、ばたばたと二人で並んで歩きます。ガラガラと玄関を開けて、

「おじいちゃん、おかずもってきたよー。」

とさげぶと、

「はい。ありがとねー。」

お風呂上りで横になり半分夢の世界に行きながら野球の巨人の試合を見ていたおじいちゃんは、にこにこ笑顔で答えてくれます。そしていつものようにお菓子や果物をくれます。家に帰り母にもらった物を見せると、「またもらったの、よかったね。」

と母はちよつとうれしそうに言います。

後何年今のような生活を続けていけるでしょうか。

私たちが大人になって、おじいちゃんが今よりもっと年を取って、田も畑もいつまで続けられるでしょうか。

そんなことを考えていたら、夕焼けの中に汗びっしょりの丸くなったおじいちゃんの背中が、二回り小さくなった気がしました。

「お母さん、今晩のおかず何、私おじいちゃん家を持っていくから。」

大声で言いました。